

華人を取り巻く政治構造の変化——華人代表者の不在

篠崎香織

今日は華人社会の視点からワワサン 2020 (Wawasan2020) を振り返りながら、1990 年から 2020 年の間の華人をとりまく新たな政治状況に着目して話題を提供します。

話題を提供するにあたり、2020 年 12 月の現在、華人がワワサン 2020 をどのように振り返っているのかをまず整理したいと思います。

2019 年 10 月にマハティール首相が、「ワワサン 2020 は十分に実現されなかった」として、後継となる共栄のビジョン 2030 (Shared Prosperity Vision 2030) を発表しました。そのこともあり、2019 年末から 2020 年初頭にかけて、ワワサン 2020 に関する記事や論考が華語や英語の新聞や雑誌、オンラインメディアで数多く見られました。そこでは、期待していたような経済発展は実現しなかったという評価とともに、バンサ・マレーシア (Bangsa Malaysia) を話題とする議論が多く見かけられました。

ワワサン 2020 は、マハティールが 1991 年 2 月に行った演説「マレーシアが進む道 (ビジョン 2020)」(Malaysia : The Way Forward (Vision2020)) で提示されました。そのなかでマレーシアが先進国となるために実現すべき 9 つの戦略的な挑戦が示され、第 1 の挑戦として国家に忠誠を誓い献身する一つの民族バンサ・マレーシアの構築が掲げられました。バンサ・マレーシアは、安寧と調和のなかで暮らし、領域的にも民族的にもまとまり、あらゆる局面で協力し、公正で対等な関係にある民族と定義されました。

マレーシアの人たちはマハティールの演説を踏まえつつ、自らにとってより望ましいありかたにマレーシアを引き寄せるべく、バンサ・マレーシアという語にそれぞれに価値や解釈を盛り込みながら使ってきたように思います。華人の場合は、マレー人、華人、インド人として自らを認識したり、あるいは他者を認識したりするより前に、マレーシア人として自他を認識するようなマインドを持つべきだという意味で使うケースが見られます。他方で、マレー人、華人、インド人といった自他意識を維持することを否定せず、それぞれの民族が固有性を維持しながら調和の中に共存し、民族を越えて協力し合う共同体を形成しようという思いを込めてバンサ・マレーシアを使うケースも見られます。

30 年の時を経てバンサ・マレーシアは構築されたのかということが、多くの記事や論説で論じられています。それをまとめると、バンサ・マレーシアおよびそれを掲げたワワサン 2020 は概ね以下のような流れで語られています。

最初に語られるのは、90 年の総選挙で国民戦線の得票率が 53% に留まったこと、その背景の 1 つに華人が国民戦線から離反したことです。マハティールがワワサン 2020 を掲げた背景の 1 つは、華人の支持を国民戦線に取り戻すことであったと語られます。またワ

ワサン 2020 の公表とともに、民営化を推進して経済を成長させ、全体のパイを拡大する政策が取られたことが指摘されます。この中で商機を見いだした華人も多く、そのこともあり 95 年総選挙では華人が再び国民戦線を支持するようになり、国民戦線の得票率が 65% に達したと肯定的に評価されます。97 年にアジア通貨危機が発生し、マハティールがアンワルを失脚させ、政治改革を求めるレフォルマシが展開したことについては、マレー人社会における大きな政治的対立であったととらえられます。この対立を制するためマレー人政治指導者たちが民族の感情を煽ったり、利用したりすることはなかったとして、90 年代以降の民族間関係は概ね平穏であったと肯定的に評価されます。これに対して 2005 年以降、マレー人の支持を確保するために UMNO が民族や宗教を争点化するようになり、それが原因となって宗教や民族で社会が分断される傾向が強まり、現在のマレーシア社会はあまり理想的ではない状況にあるという声が聞かれます。

このように 2019 年から 2020 年の記事や論説に見られる華人によるワワサン 2020 についての語りでは、バンサ・マレーシアが話題になることが多く、バンサ・マレーシアはいまだ実現しておらず、それを阻んできたのは UMNO であるというとらえ方がされています。

こうした語りは、2005 年以降の華人を取り巻く政治状況の変化と大きくかかわるように思います。華人の間では 2005 年頃から、国民戦線で UMNO が一強状態にあり、それを是正したいという思いが見られるようになりました。それは 2008 年以降の総選挙における華人の投票行動の 1 つの背景となっていたと言えます。それは結果として、政府における華人の代表者の不在という大きな変化をもたらしました。この変化は、ワワサン 2020 が発表された 1991 年の時点からの大変化であるのみならず、1957 年にマラヤ連邦が独立して以来のマレーシア史上初めての出来事でもあります。

半島部では、脱植民地期および国民国家形成期を通じて、マレー人、華人、インド人はそれぞれ固有の民族として認識され、それぞれに民族政党を設立し、それら政党を通じて政府に代表者を送り出すという仕組みが作られました。民族政党とは、UMNO、MCA、MIC を指します。これら民族政党が連立して連盟党及び国民戦線を構成することで多民族政党が緩やかに成立してきました。

しかし 2005 年以降、MCA は国民戦線内で UMNO の勢力を止められず、UMNO に対して従属的な地位に甘んじていると華人の有権者から批判されるようになりました。MCA は 2004 年総選挙で 31 議席を獲得しましたが、2008 年総選挙では 15 議席、2013 年総選挙では 7 議席を獲得するのみとなってしまいました。華人は MCA に投票しなくなりました。それによって華人は、MCA に対する不信任を表明し、かつ UMNO を中心とする国民戦線に対する不信任を表明しました。2013 年総選挙後には、MCA は華人の信任を得られなかったとして、閣僚から村長に至るまで官職を辞すこととなりました。これによって連邦・地方政府に華人の代表者が不在となるというマレーシア史上初めての状況が発生しました。

華人の代表者の不在は約 1 年後に解消しました。しかしこれ以降華人社会には、「どのように代表を政府に送り出すのか」をめぐる議論が見られるようになりました。政府にお

ける代表として、まず閣僚を挙げることができます。1990年代から2000年代半ばまで、新村を管轄する都市福祉や住宅に関わる省と、華語教育の存続を左右しうる教育に関わる省の閣僚は、主にMCAの議員が任命されました。これら閣僚ポストに華人が任命されることは、華人の間でもそれなりに重視されていました。しかし2013年総選挙の前後あたりから、華人が閣僚に任命されても華人社会にもたらされる利益はそれほどないので、華人の閣僚は不在でも問題はないという声が聞かれるようになりました。その一方で、華人の閣僚が政府に不在となるのは大問題だという声も聞かれます。しかしだからといってMCAを支持しようという論調はあまり見かけられません。MCAを支持する限り、UMNOが一強を占める国民戦線を支持することになるためです。

2008年以降、華人の支持を集めているDAPが国民戦線と連立を組んで華人代表として政府に参加すべきだという意見もちらほら聞かれます。他方で、DAPがUMNOと組むことになればそれは大きな変節であり、華人有権者を裏切る行為であると批判的に見る人も少なくありません。またUMNOと組めば誰であってもUMNOに圧倒されてしまい、結局UMNOの言いなりになってしまうのではないかとの懸念もよく聞かれます。

2018年総選挙で政権交代が起こり、希望連盟政権が発足しました。UMNOは下野しましたが、その後の展開は必ずしも華人の期待に沿ったものではありませんでした。華人はDAPに華人の代表者としての役割を期待していました。これに対してDAPの議員の多くは、自身はマレーシア人の代表者であり、特定の民族の代表ではないという立場を取っています。こうしたDAP議員たちのスタンスを積極的に支持する華人も少なくありません。しかし他方で、華人の支持に依拠して当選したのだから華人の思いを汲んで華人の代表として振る舞うべきであるという意見も多く聞かれます。華人の代表であり、かつマレーシア人の代表でもあるという立場を取れば良いではないかという指摘も聞かれます。

DAPが華人の代表として振る舞わなくても、希望連盟政権の政策が華人にとって受け入れ可能なものであれば問題はなかったかもしれません。しかし実際のところ、希望連盟政権の政策や指導者の言動の中に華人の反発を招くものがいくつかありました。DAPは政府内にいながらも、そうした政策を止められなかったという失望のようなものも聞かれるようになっていきます。

冒頭に紹介した、2019年10月に発表された共栄のビジョン2030は、ブミプトラが華人と比べて経済的に低い水準にあるとして、ブミプトラの経済的な地位向上を含んでいます。マレー人による資本の保有率を30%に引き上げるとの目標も設定されています。これらは1970年に開始した新経済政策を彷彿とさせるものです。そのため華人の間には、共栄のビジョン2030を支持する声はあまり聞かれず、冷淡な反応が多いように思います。

希望連盟政権は必ずしも華人の期待に応えるものではありませんでしたが、最もましな選択肢として華人にみなされていると思います。ただご存じの通り、政党間での議員の移籍や、政党間の連立の組み換えなどを通じて、希望連盟は2020年2月に政権を失いました。新しく成立したのはマレー人政党による連立政権でした。この連立政権にはMCAが国民戦線を通じて参加していますが、MCA所属の下院議員は2名のみで、華人の代表者

を自認する政党は国会にはほとんど存在しないと見ることもできます。

華人人口の割合が相対的に減少していることもあり、華人の間では政治における華人の周縁化が非常に強く懸念されています。華人の代表が不在ともいえるような現政権下で、華人は政治的・社会的に周縁化されてしまうのか、それとも別の仕組みが働いて周縁化は避けることができるのか。多民族政党の連立による政権奪取に希望を託すのか、あるいは政権奪取のために UMNO と連立を組むという選択肢もありうるのか。華人の代表者を自認する民族政党が復活する可能性もあるのか。ワワサン 2020 が終わろうとしている現在、華人は、独立期およびワワサン 2020 が提唱された 1990 年代とは大きく異なる政治構造の中にあります。その政治構造が今後どのように展開していくか、そのことがマレーシア全体のあり方にどのように作用していくのが注目されます。

(しのぎき・かおり 北九州市立大学)